



第5回 論語指導士 中崎佳代子（第百六十号） 富山県

私は、富山県富山市に在住している。過去、富山藩は加賀藩から独立したわずか10万石の貧しい藩であった。土農工商という産業構造から述べると、生産性のない武士が多いところで、藩の財政は困窮していた。そこで富山藩は藩校を早期に作り、教育体制を整えた。富山藩は貧しいが故に人を教育で創ろうとした。その藩校が「廣徳館」である。廣徳館は現在、護国神社に引き継がれ、廣徳塾の主催者が子どもたちに論語を教えている。私は、昨年まで「廣徳塾」という見識の高く素晴らしい有志が揃っている集まりの末席で学んでいた。

.....

2年前から児童養護施設において、4歳から11歳までの子どもたちに論語の素読をする活動をしている。昔は児童養護施設に預けられる子どもらは親のない子がほとんどであったが、今は100%親がいるようだ。

私がこの活動を始めたのは、環境差別を受ける子どもたちに、心の拠り所を持ってもらいたいという思い上がった考えからであった。今思うと恥ずかしくて、自分の傲慢さにあきれかえるのであるが、愛情や金銭に飢えている施設の子どもたちは不幸であるという間違った認識から始まった行為であった。

施設の子どもたちは、確かに愛情に飢えて屈折した感情を見せることがたびたびあった。しかし、どの子どもらも自分の未来を、自分で思い描いているように見えた。大人の悲しい事情を理解しつつ、一生懸命、今を生きていた。

思えば、貧困や苦境のなかから偉人は現れた。大学を読んでいる姿が像になっている二宮尊徳しかり、西郷隆盛も下級武士、最年少ノーベル平和賞受賞のマララ・ユスフザイさんも過酷な環境の中で育っている。

どんな環境であっても志があれば、変えられるものがある。今は素直に信じたい、自分の生まれてきた意味を。そして上げたい、人がこの世にいる価値を。

論語の活動は子どもたちのために始めたことだが、自分の方がたくさんの事を教えてもらった。「一簣を覆すと雖も、進むは吾が往くなり。」この言葉通り、やり始めて初めて1歩が踏み出せた。論語が引き合わせてくれたたくさんの出会いと教えに深く感謝する。論語は自分にとって、生涯の学びとなるだろう。



「加地伸行からの百字答礼」

中崎佳代子様へ。

過酷な環境の子たちだからこそ、ぜひ論語で勇気づけてあげて下さい。子どもらの心に深くしみ込んでゆくことと思います。彼らが成長してゆく日々が、論語のことばと共に、でありますよう、お祈りしております。